



9階東 産科病棟の紹介

周産期センター医長

ひらやま えみ
平山 恵美

当院は道央圏唯一の総合周産期母子医療センターです。その期待される役割は、合併症妊娠や切迫早産、重症妊娠高血圧症候群、胎児異常、産科出血など、母体または児にとってリスクの高い症例の医療と看護に最善を尽くすことです。

北海道の人口の6割を占める道央圏にあって、唯一の「総合周産期センター」認定施設ですので、年間の母体搬送数も多く、毎年110～140例ほど受け入れております。搬送例の約6割は切迫早産や前期破水症例で、昨年度の極低出生体重児（1500g未満）分娩は71件ありました。刻々と状態の変化する母体・胎児に対して、産科ベット36床（うち母体胎児集中治療室6床）、産婦人科医11名、助産師・看護師33名で、24時間体制の診療にあたっています。母体搬送例の中には、突然の搬送で妊婦さんが混乱している場合も多く、患者・家族に対しての精神面のサポートも非常に重要です。治療をうけながらも妊娠・分娩・育児期を安心して過ごせるよう、カンファレンスを行いながらチーム医療を行っております。

また、当院では分娩期を通じて家族ですごすことで苦痛や喜びを分かち合うことを目標に「立ち合い分娩」の導入を検討しておりましたが、いよいよ平成24年11月より本格開始となりました。現時点では緒事情から実施基準を設けており、希望されていても実施できない場合がありますが、今後も市民の皆様が期待する医療施設であるように努力していきたいと思っております。



胎児心音確認中の平山医師



9階西病棟の紹介

看護師長

たかはし まさよ
高橋 昌世

当科は、2006年総合周産期母子医療センターの新生児科部門として指定を受け、道央圏の周産期医療の基幹病院となっています。2009年にNICU（新生児特定集中治療室）は15床に増床し、GCU（回復治療室）21床と合わせ36床の病床です。新生児の専門医が6名勤務しており、24時間待機しハイリスク新生児の受け入れを行なっています。年間300名前後の入院患者を受け入れており、約6割は低出生体重児で1000g未満の超低出生児が年間30名程度入院しています。4割は何らかの異常が認められた成熟児ですが、総合病院としての強みを生かし、小児外科、脳神経外科、形成外科、呼吸器外科、耳鼻咽喉科などと連携し診療を行なっています。



看護師からお母さんの母乳をもらう赤ちゃん達

看護職員は47名（新生児集中ケア認定看護師1名）でNICU・GCUの2つのチームに分かれ固定チームナーシングプライマリー制で看護を提供しています。看護部理念に基づき「小さな生命の救命、成長発達を支え、家族関係の形成を支援する」ことを看護方針としています。患者さん一人ひとりを尊重し、安全で優しい看護ケアを提供しています。そして、ご家族との時間を大切に過ごせるように配慮しています。赤ちゃんが感じるストレスを少なくし、成長・発達を妨げないことを心がけ、赤ちゃんが本来過ごすべき胎内生活に近づけられるように環境を整え、過剰な刺激となる要因を取り除くようにケアしています。また、タッチケアやカンガルーケアを行いご家族が赤ちゃんに触れ合う時間を大切にしています。赤ちゃんの退院の際には、不安なく赤ちゃんを新しい家族の一員として迎え入れることができるように支援させていただいています。